

森林整備Ⅰ

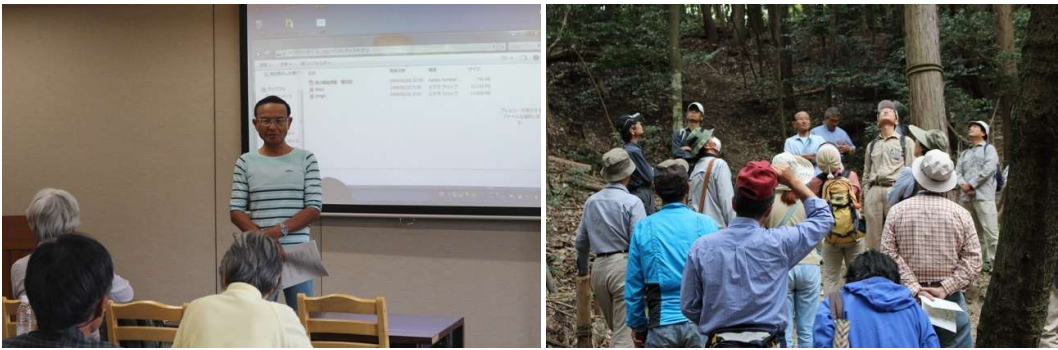
森林から里へ ～生物回廊づくり～

(理論と実習)

日時：平成26年9月20日(土) 10:00～15:00

講師：林 進(岐阜大学名誉教授・雑木林研究会会長)

概況



科目名：森林整備Ⅰ 森から里へ ～生物回廊づくり～(理論と実習)

講師：岐阜大学名誉教授・雑木林研究会 会長 林 進

1時限目：座学

「回廊」という言葉の意味を考えると、生物における回廊は「何かが行き来する経路」を意味することが多い。「エコトーン」とは、「隣接する生物群集間の移行帯」を意味する言葉で、森と草地をみると、森と草地の間である「林縁」となっている場所がエコトーンである。エコトーンには、2つの場所における生物がそれぞれ生息し、行き来するため、生物多様性が高いという特徴がある。

環境がモザイク状に配置されていれば、エコトーンが随所に形成されることとなる。モザイクが集まりエコトーンが形成され、個々の環境がつながることにより、それぞれの単位の環境の役割が増すのである(シフティング・モザイク)。エコトーンは、環境のつながりを保つ「のりしろ」の役割を果たす移行帯であるとともに、生物が行き来する場でもあるため、「生物回廊」の機能も持つ。そのため、エコトーンの喪失がなければ、野生動物がいきなり人間側の空間に出現することはない。また、森を破壊するということは、エコトーンも破壊してしまうことになる。

カメを例にみると、林・森、草地・裸地、岸辺、水の浅いところ、水の深いところを用

途によって使い分けている。それぞれの要素やエコトーンが重要であり、どれか1つがなくなってしまうと、生息できなくなってしまう。ゲンジボタルについても同様であり、生息には様々な環境を必要としている。

2時限目 ; 座学、現地実習

地形や植物相などを階層と平面で図面化してみると、様々な角度から見ることで、判断しやすいという利点がある。また、一度伐ってしまった木は元に戻せないため、図面上においてシミュレーションをすることも大切である。

現地実習では、海上の森の幼児体験フィールドから吉田川沿いの林道までの各所において、実際に木の様子や森の様子を見ながら、スギ・ヒノキの特性や、光と植物・樹高と土地の豊かさとの関係性、針葉樹と広葉樹の配置により斜面が安定することなどが説明された。

その後、センターに戻り、林分や山の管理方法などの説明および総括がなされた。